

社会的事象とのかかわり方を創造する子どもの育成

～実社会にある本物の問題とかかわる単元づくりの工夫～

中山 和幸

小学校社会科教育の究極の目標は、公民的資質の基礎を養うことである。公民的資質の基礎とは、日本人として平和で民主的な国家・社会の形成者としての自覚をもち、自他の人権を互いに尊重し合うこと、社会的義務や責任を果たそうとすること、社会生活の様々な場面で多面的に考えたり、公正に判断したりすることなどの態度や能力であると考えられる。すなわち、よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎であるといえるだろう。

本研究は、そのような資質や能力の基礎を育てるために、子どもたちが実社会にある本物の問題と出会い、かかわることで、さらによりよいかかわり方を模索することに重きを置いた単元づくりの工夫を行い、社会的事象とのかかわり方を創造する子の育成を目指したものである。

キーワード：公民的資質の基礎、社会参画、本物の問題、社会的事象のかかわり方、単元づくりの工夫

1. 研究の目的

1. 1. 学習指導要領解説より

現行の平成20年度版学習指導要領解説(社会科編)では、子ども一人一人に公民的資質の基礎を養うために社会科の学習指導において、問題解決的な学習を一層充実させ、よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎を養うことの重要性が示されている。

1. 2. 社会的事象とのかかわり方を創造する必要性

高学年の子どもの中には、社会科はたくさんの用語を覚える暗記教科だと思っている子どもがいる。自分と教材である社会的事象とのかかわりを感じたり、気にしたりすることなく、とにかく必死で用語を覚え、覚えた用語を必死で再生する。このような学習経験を積んだ子どもたちは確かに社会科を暗記教科だと思うだろう。そのような学習においては、問題解決的な学習など存在しない。また、そのような学習の上に、よりよい社会の形成に参画する資質や能力は育まれないだろう。

では、社会科の学習の中で、よりよい社会の形成に参画する資質や能力を育むにはどのような授業をすればよいのだろうか。

1. 3. めざす授業像

私が、本研究にかかわって社会科の授業でめざすのは、人のさまざまな工夫や努力によって社会的事象が成り立ち、自分の生活が支えられていることを理解しながら、自分の生活・行動を振り返り、社会的事象とのかかわり方を創造する子どもの姿である。

本研究では、社会科の授業をとおして、このような「社会的事象とのかかわり方を創造する姿」の具現化に取り組みたい。

1. 4. 授業の要件

本研究では、よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎を養うことができている子どもの姿を「社会的

事象とのかかわり方を創造する姿」と捉え、授業実践に挑んだ。

上記の子どもの姿を具現化できる授業の要件とはどのようなものだろうか。以下の3点を重視した授業づくりを行うことで育てたい子どもの姿を具現化したいと考えた。

- ①地域教材を扱った学習を構想する。
- ②地域の人が困っている実際の問題の解決に挑む問題解決学習を構想する。
- ③学んだことを地域に発信する(生かす)場面を設定する。

本研究の主たる目的である「社会的事象とのかかわり方を創造する姿」を実現するためには、子どもたちが実社会にある本物の問題と出会い、かかわることで、さらによりよいかかわり方を模索することが重要であると考えた。そのため、上記①②③は授業の要件として欠かせないものと考えた。

1. 5. 研究仮説

これまでのことを踏まえ、「社会的事象とのかかわり方を創造する子ども」が育つための研究仮説を以下のように設定した。

実社会にある本物の問題と出会い、問題解決する過程において、社会的事象とのかかわり方を模索し、意思決定することで、社会的事象とのかかわり方を創造する子どもが育つだろう。

このように、前述した授業の3要件を大事にしながら、①問題との出会い→②問題解決方法の追究→③問題解決方法の決定→④問題解決方法の実行→⑤問題解決の5つの学びの点を通ることで、めざす子ども像を具現化できると考えた。

2. 研究の方法

以上のような仮説をもとに仮説検証型の研究実践を行い、研究の成果と課題を明らかにする。

具体的には子どもの振り返り作文をもとに、あらかじめ教師が想定した「社会的事象とのかかわり方を創造する姿」をみとり、研究の成果と課題を明らかにする。

2. 1. 単元づくりの工夫

社会科で育成すべき資質・能力である「よりよい社会の形成に参画する力」を「社会形成力」と捉え、その育成に向けて創意工夫を重ねている社会科授業を「社会参画を志向する社会科授業」と位置付ける考え方がある。(唐木 2010) その理論の下では、社会形成力の構成要素を①科学的社會認識、②意思決定力、③社会的実践力とし、それらの力を育む学習過程をそれぞれ以下の第1類型～第3類型としている。

《第1類型》

科学的社會認識の育成を目指す社会科授業

《第2類型》

意思決定力の育成を目指す社会科授業

《第3類型》

社会的実践力の育成を目指す社会科授業

そして、社会参画に基づく社会科授業では全体的には社会形成力の育成を目指し、個別的には科学的社會認識→意思決定力→社会的実践力と段階的に各能力を育ていく必要があるとして図1のようなモデルを示している。

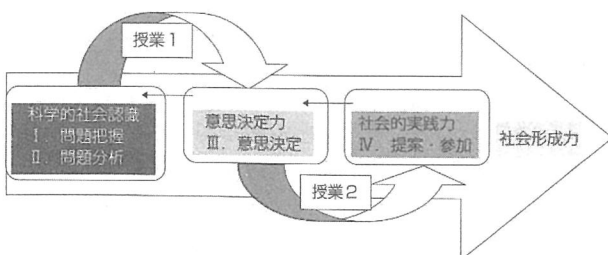


図1：唐木作成による社会形成力育成授業モデル

本研究では、この授業モデルを参考にし、以下の3つの学習過程を重視した単元の工夫を行っている。

- ①主として社会認識の育成に向かう問題解決
- ②主として公正な判断力の育成に向かう問題解決
- ③主として社会参画力の育成に向かう問題解決

特に、②主として公正な判断力の育成に向かう問題解決及び③主として社会参画力の育成に向かう問題解決の学習過程については、社会とのかかわり方を探り、意志決定したことを実行に移す過程であるので、「子どもが社会的事象とのかかわり方を創造する」上で大変重要な学習過程であると考えた。

2. 2. 地域社会にある課題を教材化する

地域課題の教材化は、地域に閉じこもって学習することではなく、むしろ視野を広げるために必要である。なぜなら、地域という「物差し」とおして、他と比較したり、類似性や相違性をみつけたりすることによって、他を知り、他に学ぶことを可能にするからである。地域は子どもたちにとって、身近でありながら、世界とつながっており、同時にまた、世界の縮図を見ることができるのである。

ここで、本実践において用いられる「地域」とはどのようなものかについて改めて整理しておきたい。

地域とは、子どもたちが生活している場所であり、そこはたくさんのよりよく生きようとする人々が暮らしている場所である。また、子どもたちにとって、物理的に近いだけでなく、子どもたちにとって、親近感が湧いたり、強く思い入れがあったりするなど、心の距離が近い場所である。

2. 3. 実社会にある本物の問題と出会う

子どもは知識・経験とのずれが生じる社会的事象と出会うと驚きや不思議さを感じ、問いをもつ。また、学習を進める中で、自分たちの学習のサポートをしてくれた地域の人たちが困っている問題と出会うと一緒に考えたい。さらに、自分たちの願いとは真逆の社会の実態に出会うと大きく問題意識を持ち、問題を解決したくなる。

このように、子どもたちは社会に実在する様々な問題に心を動かし、追究意欲を高める。

実社会にある本物の問題に出会うことは、このように子どもたちの追究意欲を高めることができるだけでなく、子どもの問題解決を現実的にするよさがある。子どもの思考を現実的なものにするすることで、後の問題解決も現実的なものとなり、非現実的で空想的な社会的事象とのかかわりは避けることができるだろう。

実社会にある問題の中には、大人でさえも解決方法に悩んでおり、答えが見出せないものがある。大人が実社会の中で悩んでいる問題を子どもたちが解決することは容易ではなく、そもそも明確な正解があるものではないだろう。しかし、そのような「答えのない問題」に対して、子どもたちが主体的に調べ、仲間と協働して問題解決を図ることで「社会的事象とのかかわり方を創造する姿」を引き出したいと考えた。

2. 4. 学んだことを地域に発信する(生かす)。

変化に富む現代社会に生きる一人の人間として、社会的事象とのかかわり方を創造するために子どもたち一人一人に社会の一員としての自覚を育てる必要がある。そのためには、教室内部に閉じられた社会科学習では、不十分であり、自分たちが学習を通じて、思考し、理解したことを地域に提案・発信していくような「地域への働きかけ」を行ってこそ、社会の一員としての自覚をより強くもて

るのではないかと考えた。

単元の終末において、子どもたちがよりよい社会の形成のために構想したことを地域の人に発信していく。このような活動が子どもたちの経験知となり、社会の一員としての自覚を深めていくことができるのではないかと考えた。

3. 授業の実際

3. 1. 単元づくりの工夫

①主として社会認識の育成に向かう問題解決②主として公正な判断力の育成に向かう問題解決③主として社会参画力の育成に向かう問題解決の3つの学習過程を意識し、5年生「わたしたちの暮らしと水産業」の学習で単元づくりをした。

《単元の流れ（全21時間）》

①主として社会認識の育成に向かう問題解決

和歌山の水産業の現状を知り、単元の問いをつくったり、予想をしたりしよう。（2時間）

・海草振興局の人の話を聞き、和歌山の水産業の概要を知ることによって「問い」をもち、学習問題を設定する。

沿岸・沖合・遠洋漁業について知ろう。（2時間）

和歌山の水産業の未来を予想しよう。（1時間）

・資料やグラフから和歌山の水産業の未来を予想する。

《予想》

沖合漁業、沿岸漁業、遠洋漁業はすべて、生産量が減っているけれど、養殖は安定している。養殖で生産量を増やしていくことに期待できる。養殖のように魚を育てる漁業が増えていこう。

天然と養殖について話し合おう。（2時間）

生産量全国第2位の鮎の養殖を見に、酒井水産の見学に行こう。（5時間）

《単元目標に関わる思考》

・養殖漁業の特色や意味について考える。
・養殖漁業に従事する人の工夫や努力、自分たちとのつながりについて考える。

②主として公正な判断力の育成に向かう問題解決

和歌山の鮎の養殖の生産量をあげていくために必要なことを考えよう。（2時間）

養殖漁業者が減っている問題の解決策を考えよう。（2時間）

③主として社会参画力の育成に向かう問題解決

考えた解決策や水産業の学習をまとめ、発信しよう。（5時間）

3. 2. 地域にある問題の解決に挑む

本実践における地域の問題は「鮎の養殖業者が近年減っているということ」であった。5年前までは、生産量全国第1位だった和歌山県の鮎の養殖だが、近年養殖業者が減っている。子どもたちは、学習をとおして、和歌山県の養殖鮎業者がこだわりをもって安全安心でおいしく食べることができる鮎を育てていること、そして、そこにはたくさんの工夫や努力があることなどを学習してきた。学習をとおして、地域の養殖鮎に誇りをもち始めた子どもたちは、鮎の養殖業者が減っていることに対してすぐに危機感を覚えたようだった。「こんなにも手間ひまかけて育てている紀州仕立て鮎を絶やしてはいけない」「自分たちにできることはないだろうか」等の願い・思いをもって子どもたちは意欲的に学習に取り組んだ。

そして、子どもたちなりに行き着いた自分たちにできることは、紀州仕立て鮎のPRをすることであった。

本実践において、地域にある問題を子どもたちが認識するためにとった手立ては大きく2つであった。

- ①「和歌山の漁業就業者人口の変化」のグラフを提示し、漁業をする人がどんどん減っていることを確認すると同時に「日本の水産業就業者人口の変化」のグラフを提示し、和歌山の養殖業と日本の水産業の共通課題が、就業者減少であることを確認する。
- ②見学調査に協力いただいた養殖鮎業者の方も「漁業就業者人口を増やすこと」に悩んでいて、みんなの意見を聞きたいって言っているということ伝えることで問題を認識させ、問題解決の意欲を高める。

3. 3. 自分たちにできること～ちいきっずカフェ～

紀州仕立て鮎のPR方法を模索するために子どもたちは調べ学習と話し合いを繰り返し、様々なPR方法を一人一人が考えることができた。

子どもたちが考えたPR方法は以下であった。

- ①学校給食に「紀州仕立て鮎」を出すことで附属小学校の子どもたちにPRする。
- ②地域のみなさんに「紀州仕立て鮎」のことをPRすることで、たくさんの人に知ってもらおう。

①については、総合的な学習の時間において「紀州仕

立て鮎を給食に出そうプロジェクト」として学習を進めていった。

②については、社会科の学習の中で準備を行い、街中で「紀州仕立て鮎のPR」活動を行った。そこでは地域の方々に自分たちの思いや考えを発信することができた。

「紀州仕立て鮎のPR」を行う上で、子どもたちは、「あゆつりゲーム」、「プレゼン用のポスター」、「自分たちの話を聞いてくれた人へのお土産（オリジナル鮎キャラのマスコット）」などを準備してPR活動を行っていた。

「鮎の養殖業者が減っている」という問題を自分たちなりに重く受け止め、「自分たちにはできることは、紀州仕立て鮎のよさを知ってもらうことだ」「そして、そのためにPR活動を行うんだ」と自分たちなりにできることを考え、実行に移していく主体的な問題解決の姿が見られた。

4. 授業の考察

本研究実践について、子どもの振り返り作文をもとに仮説の検証を行い、本研究主題に掲げている「社会的事象とのかかわり方を創造する子ども」の具体的な姿を明らかにしたい。

4. 1. わたしなりの願いをもってかかわろうとする

図2には、「私の願いは…和歌山が漁業に適しているのをみんなに知ってもらえたら、魚が好きな人は漁師になってもらえると思います」という記述がみられる。

これは、「水産業に従事する人口が減っていることを受けて、和歌山が漁業に適していることをみんなに知ってもらうことで、水産業に従事する人口が増えるのでは」という考えのもと、社会的事象に対してわたしなりの願いをもってかかわろうとする姿と言えるのではないだろうか。

私の願いは、和歌山はせかく海に囲まれているのだから、たくさん所で漁業ができるし、海に面している所が広いからやる人が少なくなってるから、とてももったいないと思う。なので、和歌山が漁業に適しているのをみんなに知ってもらえたら、魚が好きな人は漁師になってもらえると思います!!

図2：子どもの振り返り作文①

4. 2. 社会的事象について詳しく知ること、自分なりにかかわろうとする意欲を高める。

図3の子どもの作文からは、学習をとおして、社会的事象にかかわり様々な発見があったことが読み取れる。自分が知らなかった工夫や努力を知り、社会的事象に価値を見出し、認識を深めている様子が「あせと涙の工夫と努力があってこそその鮎だから」という言葉に表れている。

社会的事象についてくわしく知ること、社会的事象にかかわる意欲を高めることができるのではないだろうか。

一つ目は、みんなに美味しい鮎を食べたことがないかいるということにたいして、少し食べれなかつた感じがすると思います。とくに養殖鮎は、さずをつけないように工夫もしていた。鮎が養殖になつていないかなどとしたし、カリシ管理がおこなわれていた。みんなものを食べずに、栄養たっぷりのものを食べにしているから、そのあせと涙の工夫と努力があってこそその鮎だから他のどんな鮎より最高ということを知りたいです。あと、養殖業をする人が減ってきていて、こういうおこく、おいしい鮎がたまたまとしてるから、しょうかり人が増えてほしいという願いでPRしています。

図3：子どもの振り返り作文②

4. 3. 地域に発信することで社会的事象にかかわることのよさを実感する

図4には、自分たちが発信したことが地域の人に伝わり、嬉しくなった気持ちが記述されている。ここには「今度3人で（鮎を買いに）行こうか」と言っていた家族がいたことに自分たちの発信の意義を見出している姿が現れている。

この学習のおかげで、和歌山は魚がおいしいという事を知れたし、水産業をする人が減っているという事も知れたし、毎日、いろいろ知識が豊富だった。それに、その事を「ちいさなカフェ」の時にいろいろの人に伝えて、「今度3人で行こうか」と言っていた家族がいた時、とても嬉しかった。魚とって、和歌山と常識のように覚えてもらえるくらい有名になってほしいです。この調子で、全国に広がる事を楽しみにしています!!

図4：子どもの振り返り作文③

5. 成果と課題

地域の課題を教材化し、地域にある現実の問題解決を学習の中に位置付けることは、子どもの学習意欲を高め、願いをもって社会的事象にかかわる姿を具現化することに効果的であった。また、学習をとおして考えたことを地域に発信するなどして、実社会に対して働きかけていくことは、社会的事象に対して認識を深めたり、自分の学びの意義を実感したりすることにつながった。

一方で課題もある。それは地域の課題を子どもたちの興味、関心、ものの見方・考え方、学習経験などと照らし合わせながら教材化する難しさである。日頃から地域の課題に目を配り、教材化できそうなものをするべくキャッチする教師の高いアンテナが必要である。

参考文献

- ・文部科学省(2008)「小学校学習指導要領解説社会編」
- ・唐木清志・西村公孝・藤原孝章(2010)「社会参画と社会科教育の創造」学文社